

図書館報 ぶらっつ★篠崎 037号

特集「私が思う怖いもの」

- P3 そのメロディに魅せられて♪
「帰ってきたヨッパライ」
（「ゴールデン☆ベスト フォーク・クルセガーズ」収録）
- P4 人物ブックマーク
「マルキ・ド・サド」
- P4 スタッフのセレクション！
「女たちの怪談百物語」

熱戦!! 第2回 ビブリオバトル in SHINOZAKI

去る7月20日（日）に篠崎図書館で「ビブリオバトル」を開催しました。篠崎図書館での開催は今回で2回目となります。ビブリオバトルとは、バトラー（発表者）たちが、それぞれおすすめの本を紹介した後、参加者全員でディスカッションし、一番読みたくなった本、「チャンプ本」を投票で決定するというものです。最近は図書館や本屋さんなど様々な場所で開催されています。

今回は、前回は上回る8名のバトラーが参戦しました。前回と異なりテーマを設けなかったため、ノンフィクションから小説まで様々な作品が紹介され、バトラーの方々はその作品の魅力を熱く語りました。その結果、熱戦を制しチャンプ本に選ばれたのは、会社員の安村正也さんが発表した『紙つなげ！彼ら

が本の紙を造っている』（佐々 涼子著／早川書房／中央ほか所蔵）でした。東日本大震災で被災した製紙工場の再生を描いたノンフィクション作品です。安村さんのプレゼンに、私も惹き付けられました。

ビブリオバトルは、本と時計があれば出来ます。プレゼンの練習にもなりますので、仲間うちでやってみてはいかがでしょうか？ 普段は読まないジャンルの本とも出合えますよ！（風雲ふわふわ丸）



チャンプ本を紹介した安村さん

江戸川まいにんぐ 発掘 第37回
「江戸川区と友好都市・鶴岡市」

江戸川区内のイベントやスポットをスタッフが調査して身近な情報をお届けする、地域密着型のコーナーです。

今回は、8月24日（日）までのぞき文化プラザで開催されている第24回企画展示「其恵不忘」に合わせ、江戸川区の友好都市である山形県鶴岡市との関係についてご紹介します。

両都市の関係は今を遡る事70年前、児童を戦禍から守り教育を続けるために行われた“集団疎開”の江戸川区の疎開先の一部が鶴岡市だったことに始まります。親から離れて暮らす疎開に対し不安で一杯だった当時の子供たちを、疎開先の鶴岡市の方々は温かく迎えてくれました。（『江戸川区史』によると、篠崎国民学校では当初、疎開はなかったが、東京大空襲以後に鶴岡へ疎開が行われた、とあります。）

その温かい心を忘れなかった疎開児童達は、10年後の昭和29年に疎開先の鶴岡の旅館を個々に訪問し交流が始まります。昭和39年には新潟地震で被害を受けた鶴岡市にお見

舞い金を、昭和49年からは3年にわたり鶴岡市を流れる内川の清浄化のため、区特産の金魚やヒゴイの放流を行うなど、交流は続きました。そして昭和56年5月、中里区長らが鶴岡市を訪れ、盟約式典を開き、両都市は友好都市になりました。以後、平成2年に江戸川区に鶴岡市出張事務所が開設され、年間を通して物産展が区内各所で行われるなど、両都市の産業・スポーツ・芸術・文化など各分野において人的交流は今も続いています。

米どころ山形県とはいえ、戦時中の厳しい状況のなかで疎開児童を暖かく迎えてくれた鶴岡の方々。戦後間もなく70年を迎える我々も、もう一度その心を思い出してみる良い機会なのかもしれません。開催中ぜひのぞき文化プラザに見いらしてください。

参考資料	「江戸川区史 第2巻」	江戸川区史区編纂室／編	K1-21-2	篠崎ほか所蔵
	「江戸川区の学童疎開」	学童疎開の記録編集委員会	K1-37	篠崎ほか所蔵

※企画展示コーナーの各パネルも参考にしました。

イベント情報

「何を撮る？
～カメラで切り取る
身近なモチーフ～」

講師：神保 君雄氏
（船橋市写真連盟会長）

9月20日（土）

14時 開演（13時30分 開場）

場所：篠崎文化プラザ 講義室
定員：50名（事前申込み制）
8月20日（水） 14：00から図書館カウンター
またはお電話にて受付します。

カメラはあるが何を撮りたいか分からない。被写体探しに悩む初心者の方へ。写真家の神保君雄氏をお招きして、写真を撮る際の心構えや日常でのモチーフの見つけ方を伝授していただきます。自分ならではの写真の楽しさを発見してください。

人物ブックマーク



人物ブックマークとは、著名人とその著作および関連本を紹介するコーナーです。

第二十八葉 マルキ・ド・サド

あるとき急に、あなたの親しい友人が「実は俺、DSなんだ」と言ってきたとしたら、あなたは思うでしょうか？ おそらく、苦笑いしながら「あ、そうなんだ……」と答えるしかないでしょう。それと同時に、少し恐ろしい感じも受けませんか？

Sすなわち「サディズム」が、他人に苦痛を加えることで快楽を見いだす性倒錯の一種のことであることを考えれば、これが愉快な話ではないのは明らかですし、また、何よりも、目の前の人が嬉しさと快楽に酔いしれた目をしながら人を打撃している場面を想像すると、ゾッとせずにはいられません。

この「サディズム」という言葉は、フランスの作家マルキ・ド・サドの名からきています。基本的には彼の作品に由来すると言われているのですが、当の本人もかなり凄い人物で、南フランス王家につながる名門貴族の家に生まれながら、数々の事件を起こし、何度も牢獄に入れられ、最後は貧窮に苦しめられ

ながら精神病院で亡くなっています。

彼の起こした事件とはどういうものかという点、例えば、乞食女を鞭打ちし監禁したアルクイユ事件、または、娼婦に対して薬物入り菓子を与え鞭打ちし、従僕相手に男色にふけたというマルセイユ事件などなど、とにかくサディズムの語源の名に恥じぬものだったのです。そのため、妻の母はサドを入獄させようと努力する始末ですし、1790年に妻は彼を見捨てました。

ところで彼の作品についてですが、人によってはエロティックなものを想像するかもしれませんが。確かにそのような場面もあるのですが、意外や意外、哲学的な会話を多く含む思想的な小説なのです。試みに「悪徳の栄え」という小説を読んでみてください。訳者の澁澤龍彦はこの小説を「裏返しの教養小説」と言っております。とはいえ、やはりS的な小説は、少し恐ろしい感じを受けますね……。

関連書

「フランス文学案内」

篠沢 秀夫著

朝日出版社

950シ

篠崎所蔵

「悪徳の栄え」上・下

マルキ・ド・サド著

河出文庫

B953サ1・2

篠崎ほか所蔵

スタッフのセレクション

「女たちの怪談百物語」

東京・本郷にある古い旅館の地下室で、百物語……。なんとも恐ろしいシチュエーションですね。

加門七海、岩井志麻子のベテランホラー作家から、ここ数年「見えるんです」シリーズで人気急上昇中の伊藤三巴華など、参加した女性作家は計10人。さらに見届け人・京極夏彦氏の巻末寄稿付、と盛りだくさんの内容になっています。

「みなさんもご存じのように、百物語には降霊会……つまり霊を呼ぶ儀式的な側面があります。ですから、百物語をやっている最中に霊が現れた場合、たとえお祓いをできる人がその場にいたとしても、お祓いをしてはいけませんね」(加門七海・一話目より)

伊藤 三巴華 ほか著 メディアファクトリー Fオ 中央ほか所蔵

100話目が終わって、ろうそくの灯りを消すと本物の霊が現れる、とされているのは有名な話ですが、そこでお祓いをしてはいけないということまでは、あまり知られていないような気がします。

1話の長さはだいたい3ページから5ページ。文章は語り口調で書かれているので、どの話もそんなにおどろおどろした重たい感じはなく、さくさくと読み進められます。ただ、ひとつの話が短い故に、自分の中で想像がふくらんでしまうこともあります……。

これからむかえる暑い季節、一服の清涼剤としてこの本を手にとってみませんか？

篠崎図書館で働くスタッフが選んだおすすめ本を紹介します。

編集後記

今までで一番怖かったことは、大学生の時に幽霊に憑りつかれて、一週間連続で金縛りにあったことです。(風雲ふわふわ丸) ゴキブリは本当に苦手ですが、個人的には蚊のほうが嫌いです。刺されやすい体質のせいか被害が多いです。(かき氷職人) とにかくにも、体Damageあるもの、すべて怖いデス。タバコと睡眠不足以外は……。(M.弱尊)

編集・発行：江戸川区立篠崎図書館

住所：〒133-0061

江戸川区篠崎町7-20-19

篠崎文化プラザ内

TEL:03-3670-9102

[しのぎ文化プラザHP]内篠崎図書館ページ

<http://www.shinozaki-bunkaplaza.com/library/>